「パークゴルフと地域社会」

公益社団法人日本パークゴルフ協会
会長　前原　懿（あつし）

パークゴルフ発祥30周年記念式にて
とき／平成25年10月9日
ところ／十勝幕別温泉グランヴィリオ

「パークゴルフと地域社会」という演題になっていますが、話の内容は、そのような格調高いものにはならないように思います。パークゴルフ30年の歴史の中で、私なりに幾つかの焦点に絞った断片的なお話をさせていただきたいと思います。短い時間ではありますが、よろしくお願いいたします。

パークゴルフが生まれて4年後、発祥のコース「つつじコース」の隣に、河川敷を活用した「サーモンコース」が造成され、大勢の町民が、そこで遊ぶようになりました。

ある日、そんな楽しそうな様子を眺めておりますと、そこに見慣れない町民の方が一人でボールを打っていました。その人は真面目な職人で、日ごろは仕事一途なものですから、町の人との交わり、一緒に何かを楽しむ姿などは見られない人でした。

そんな人がパークゴルフを一人でやっている、その姿はちょっと不思議な感じがしたものです。

そんな人は、世の中から「変人」扱いをされがちですが、本人から見れば、別に自分が変わっているなどとは思っていないと思いましたが、案の定と言いますか、その人は、いつの間にか、パークゴルフ仲間と楽しそうに交わり、プレーを楽しむ姿をよく見かけるようになりました。

それから何年か経ちまして、平成3年6月に、私は2度目の教育委員会勤務を教育長という職で勤めることになりました。

勤務して間もなく、教育委員会に1通の手紙が届きました。その手紙を職員が見て、私のところへ驚いた様子で持ってきました。

手紙の内容を要約しますと、その方は長い間リウマチに悩まされ、教職についていたのに定年を待てず1年早く退職されました。退職後はもっぱらリウマチと戦う生活を送っていたところ、その町のパークゴルフ協会の役員の人が「パークゴルフをやってみないか」と誘ってくれたそうです。リウマチと戦っているのにパークゴルフどころではないと思いましたが、せっかく勧めてくれたものですから、クラブを握ってボールを打とうとしたところ、クラブがボールに触れた途端、全身に猛烈な痛みが走ったと言います。

しかし、パークゴルフを勧めた役員の人が、懲りずに「もう少し頑張りなさい」と勧めてくれ、その好意を無にしてはいけないと、クラブを握って毎日少しずつボールに触ることにしていたところ、何日かするとボールを少し前へ打てるようになり、そうして何カ月か、それを繰り返しているうち、いつの間にか、ほぼ普通のプレーヤーと同じようにパークゴルフを楽しむことが出来るようになりました。

その後、町のパークゴルフ大会に参加することも可能になり、パークゴルフを続けたことがリハビリになったと、感謝の手紙を送ってくれたのでありました。

お話ししたのは二つの事例ですが、ほかにも色んな事例を聞かされます。予想もしなかった出来ごとに驚かされましたが、そんな効用とか効果を考えてパークゴルフを発想したわけではなかったものですから、パークゴルフというスポーツは、ちょっと

普通のスポーツとは違う何かがあるのではないかと考えるようになりました。

この年、平成3年の暮れが近い頃、北海道を通じまして、当時の文部省主催で毎年開催されている「生涯スポーツ・コンベンション」という行事の全体会議の中で、「パークゴルフをとおしての町づくり」というテーマで話をしてほしいとお誘いを受けました。

私を名指しではなかったのですが、教育委員会に届いた話でしたから、みんなで相談した結果、お断りすることではないだろうと、結局その役割は私が責任をとることになりまして、翌年の2月、何人かの職員と一緒に東京へ向かいました。

「生涯スポーツ・コンベンション92」は東京・新宿京王プラザホテルで開催され、全国から集まったスポーツ関係者、行政関係者など約千人の前で、与えられたテーマの話をさせていただきました。

その時、非常に嬉しかったのは、すでにパークゴルフ振興会議という職員の仲間がいまして、パークゴルフと言っても、多分全国的にはまだ分からない人が多いだろうと、5分間の紹介ビデオを作ってくれたことでした。30分間の中で5分間のビデオ放映、続いて25分間の発表がスムーズに出来ました。

まあ、その成果がどうであったか、結果から言いますと、大変な反響がありました。先ほど申し上げた、孤独な人がパークゴルフを通じて、いつの間にか友達が出来たこと、また、病気と苦しみながら、リハビリとパークゴルフのことなどを、前段の話といたしまして、せっかく文部省から「パークゴルフをとおしての町づくり」というテーマをいただきましたので、では、どんな話をしようかと私なりに整理をした結果、3点にまとめて発表することにしました。

一つは、町づくりの根幹だと私は思いますが、町民同士のふれあい、つまりコミュニケーションがよくなるという効果、パークゴルフを通じた効果として、まずこれを挙げさせていただきました。

二つ目は、健康の維持増進という効果を挙げました。それは家庭の中で、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お孫さん、みんながパークゴルフを楽しみ、話がはずむこと、食事がおいしく、健康についての意識が高まる。そして家庭の中に一つの輪（和）が生まれている。そんな話をさせていただきました。

三つ目は、広く経済的な効果を生んでいる。それはどういうことかと言いますと、コースが造成され、用具が製造販売され、頭から足先までの関連用品が生まれ、愛好者の交流が盛んになる。進んで自分の町から外へ出ようと、ゆくゆくは全国的な交流の輪が広がっていくものと思います。そういう動きがすでに出ていて、トータルとしての経済効果が生まれる。そんな話をさせていただきました。

帰って来まして、早速コンベンションの効果がありました。どういう成果かと言いますと、全国からの視察来町が相次ぐようになりました。

平成4年度になってから、「体育の科学」という雑誌に掲載の依頼がありまして、その雑誌の翌年2月号に掲載する原稿を書くことになりました。表題は「スポーツの生活化と町づくり」とし、先のコンベンションでの発表した内容に加えて、パークゴルフをトータルに考えると、非日常的なスポーツではなくて、日常のスポーツであること、つまり、パークゴルフというスポーツが、日常生活の中に入っている、そういうスポーツだと書かせていただきました。つまりスポーツの生活化です。

パークゴルフを全国に発信する機会をいただいたことで、平成5年の4月には、町教育委員会に「パークゴルフ振興係」という初めての係が出来ました。そこに発令された職員は、視察の対応に追われ、文字通り「視察対応係」になってしまい、まあ、そんな状況が何年か続きました。

ここまでは、パークゴルフが生まれて4年から10年位までのことについてお話をさせていただきました。

ここからは、パークゴルフ発祥の頃を思い起こして、少しお話をしてみたいと思います。昭和58年（1983）6月、幕別町運動公園の緑地に穴を掘ったことから歴史が始まったのですが、その発祥のコースが、後に「つつじコース」と命名されました。

その当時、グラウンドゴルフの用具に出会ったことから、あとは公園に穴を掘らせてもらえば、これは狭いながらもゴルフが出来ると、私はそういう風に思ってしまったのです。しかし、勝手に穴を掘るわけにはいかないと、当時の公園管理を担当していた町都市計画課の三井係長に電話をして同意を得ました。と言っても「これこれこういう訳で穴を掘りたいけれど、いいかい」と、半ば強要に近い電話だったかも知れません。とは言え結果として穴を掘

ってしまいました。

そんな訳で、少し後ろめたさを感じながら、最初に7ホールを先ず掘って、ささやかながらパークゴルフの原型が出来ました。しかし、スティックとボールがあっても、穴に埋めるカップは無かったので、最初は給食センターの缶詰の空き缶を埋めたように記憶しています。

翌昭和59年になって、町職員や町の人たちが、面白そうだから本気でやろうと言い出し、意を強くした私は教育委員会職員と共に、7ホールを14ホールにまで広げました。

空き缶のカップから、今度は塩ビ管を埋めることにして、職員何人かで穴掘りを始めたところ、なかなか掘れません。表面の土の下は殆ど砂利とかコンクリートのかけらまで出てきて難儀しました。後で三井係長（当時）に聞くと、緑地となる一面に工事残土を埋めて、その上に表面土を乗せ公園にしたと言います。しかし、コースが出来るとそれが幸いしました。つまり、水はけが非常によかったのです。前の日に雨が降っても、朝になればプレーには全く支障もなく、見回せば樹木も適度に配置され、築山のような傾斜があったりと、私には立派なゴルフ場に見え、嬉しくなりました。

気が早いもので、グラウンドゴルフ同好会をつくろうという声が上がり、間もなく設立され、その秋には初めての大会が、グラウンドゴルフ同好会の主催で開催されました。残念ながらその頃は、まだ、カップ以外のスティック、ボールはグラウンドゴルフの用具でプレーしていた時代でしたが、用具開発の機運はすでにあったと思います。

愛好者はまだ数十人でしたが、ここまで来ると、みんなが夢中になり、いろんなアイディアが出て、「ああしたら」とか「こうしよう」などと大変な騒ぎになってきて、これは私が手綱を引かなければ、エライことになってしまうと思うようになりました。

その年のうちに、新田ベニヤ工業、現在のニッタクスに何とかグラウンドゴルフの用具ではない、幕別町オリジナルの用具を作ってもらえないかとお願いしました。それからニッタクスは、試作と研究を重ねて昭和61年にはほぼ完成品が出来て、翌62年にクラブ（当時はスティック）とティ、ボールの市販が開始されました。

その頃、もうひとつ私の考えにあったことは、このスポーツを全町的な取り組みで推進していくべきだということでした。そこで「グラウンドゴルフ振興会議」という集まりを私的に作り、全町的に関わりがありそうな部課からメンバーを集めようと、教育委員会をはじめ、建設、経済、福祉などの職員個々に声をかけました。

合計15人のメンバーで会議を構成し、会議は後に「パークゴルフ振興会議」と名前を変えるのですが、会議では、いろんなアイディアを出し合い、パークゴルフを育てていく役割を果たすのですが、私はもっぱら調整役として方向性を誤らないように手綱を持ち続けてきたと思っています。

そして、冒頭申し上げたサーモンコースがオープンするのですが、その前年昭和61年の春に、グラウンドゴルフからようやくオリジナルなスポーツに自立するめどが立ち、名前を「パークゴルフ」と例の振興会議で命名し、同時に「パークゴルフ振興会議」と会議の名称も当然変わることになりました。

グラウンドゴルフ同好会は「幕別町パークゴルフ協会」へと設立総会を経て、役員会の中では、せっかくここまで来たのだから、大きな大会をやろうと声が上がりまして、誰の発想だったか定かではありませんが「パークゴルフ国際大会」をやることになりました。

勢いで走りだしましたが、一体どうやって国際大会をやるのかと、私は内心心配しましたが、そこは色んなアイディアが生まれて、結局ご近所サイズの国際交流と銘打つことになりました。

ところが国際大会の主催が幕別町の協会ではおかしいという声が出て、あっという間に「国際パークゴルフ協会」という組織を作ればいい、そんな乱暴な結論になりました。

結局、第1回パークゴルフ国際大会の前日に、国際パークゴルフ協会を設立するという、聞いたこともないような進め方をしましたが、パークゴルフが内から外へ、つまり外国へも向かうという大きなきっかけになったように思います。

そんなことがありまして、パークゴルフというスポーツが急速な普及をしている現状を、ここで振り返ってみると、最初から目標などを掲げて、こうすればいいとか、地域づくりに貢献できるなどという計画があったわけではなく、たまたま限られた広さの公園に究極の遊び場をつくった、それがパークゴルフ場になったということでした。

そこには、公園という姿を維持しながらの利用制限や限られた広さに工夫を加えたことが、結果的に

いろんな効果を生んだのではないかと思っています。

例えば、コースレイアウトでは、ゴルフのようにアウト・インではなく、9ホール毎にスタートの場所に帰るようにしたこと、つまり、時間のない人は9ホールで止めればいい、個人の都合に合わせる方法にしたわけです。

また、1本のクラブ、1個のボールにしたことは、狭いコースを回るわけですから、クラブにロフトと言って、ボールを上げるための角度をつけないこと、安全面のことを最大に考えての工夫で、これはあくまでこだわることにしました。

それから、公園に半ば強引に穴を掘るという、実は怒られても仕方のないことをしてしまった経緯があり、後ろめたさがありまして、それが公園の自然を大切にしようという思想につながりました。これが二つ目の工夫でした。

三つ目は、公園で遊ぶにしても、いろんな世代の人たちが遊べるように、つまり三世代・多世代の人たちが遊べるようにしたい。これは公園が特定世代のものではないという場だからです。

そこに至るには、私なりの作戦がありまして、当時の教育委員会の職員には「ゲートボールをやっている人にはパークゴルフを教えるな」でした。どういうことかと言いますと、ゲートボールをやっている人たちがパークゴルフを知ると、たちまちゲートボールの個人競技にされてしまう心配があったからです。

パークゴルフは、小・中学生がいる世代に、特にお母さん方に声をかける、するとお父さんもやってくる。そういう世代に先ずプレーしてもらうことにしました。

思惑どおりパークゴルフは面白いスポーツだと、喜んで遊ぶようになりました。しばらくすると、ゲートボール帰りの人たちが、そんな様子を見て「お前たち何をやってるんだ」と興味を持って聞いてくるようになり、初めて「これはパークゴルフというものですよ」と説明する。すると「私たちはやっちゃいけないのか」と聞かれ、「そんなことはないです。やってみますか」という風に、実は頃合いを見計らって一緒に遊んでもらうようにしました。世代を越えてみんなが楽しめるようにするための仕掛けが必要だと考えたからの作戦でした。世代を越えて抵抗なく遊ぶ、三世代スポーツを確信することが出来たわけです。

こうした私たちのアイディアや工夫が、スポーツの枠を越えて結果的に地域社会にプラスの効果を生んでいたのだと、つくづく思いだされます。そしてその効果は今も続いていると思います。

終わりに、パークゴルフが今日あるのは、草創期にさかのぼり、私の発想に共鳴してくれた職員、また町民有志の熱い思い、さらに寛大な町の気風なくしてありえなかったのではないかと、ひとしお感ずるものがあります。

その意味で、パークゴルフ30年の歴史は、〝オール幕別町〟で刻んできた歴史ではないでしょうか。未来においても発祥の町として、先進的な地域づくりの取り組みを発信し続けていただければありがたい。

今、パークゴルフには、いろんな課題があります。これからの普及に関しては、全国を網羅した協会にお願いするだけではなく、あらゆる角度で全国に発信して、パークゴルフの新しい仲間をつくっていかなければ、そして、今年世界遺産になった富士山のように、すそ野の広い、愛好者がたくさん生まれる、そういうスポーツになることを私は願っております。

限られた時間で、伝えたいことを十分に申し上げられませんでしたけれど、パークゴルフ30年の出来ごとの一端を申し上げ、私のお話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

昭和63年ごろのつつじコース